
カミサマに愛された故に憎んだ青年のモノガタリ

零夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カミサマに愛された故に憎んだ青年のモノガタリ

【Nコード】

N5289X

【作者名】

澪夢

【あらすじ】

終わるセカイを眺める青年・・・その心の内にあるのは、ただ悲しい程に・・・カミへの憎しみ

「カミに・・・愛されたい？ハッ・・・ふざけんなよ」

生と死を繰り返し、セカイを渡り続ける彼が最後に見つけ出す『答え』・・・そして、行き着く先は・・・

ある日ある時ある場所の声

（これで…良かったのかな…）

幾度と繰り返した自分への問い…

やはり答えなんてものは出ない、そもそも無いのかもしれない

（…恐らくこれが『ぼく』として『ボク』に投げ掛ける最後の問いになるだろうな…）

仰ぎ見た空は赤く、荒廃した世界は何処までも何処まで灰と赤にまみれ…

あの時垣間見た未来そのものの景色が遥か彼方に広がる

「…ああ…」

とても、綺麗だ

生き物の存在しない世界…これが、これこそが

「全てを犠牲にして追い求めた…願いの成れの果て…」

ツウ…と、静かに頬を伝い落ちるのは何だったのだろうか
今、『ぼく』は何を思っただのだろうか

ああそれすらもう、『ボク』には……………

「……このまま……消えたいな……」

戦争に、異端狩りに、人の欲望に……飲み込まれ消えていった幼
馴染達

彼らと同じ場所に行きたい

（けど……なあ、カミサマ……お前は許さないんだろう……
？）

また、同じように混沌の世界へ『ぼく』を落とすんだろう

記憶だけは全て……まるで足掻いて見せろというように鮮明に残
したままで

「……くくっ……冗談じゃない」

『ボク』はもうお前の人形遊びに付き合う気は、

「さらさら無いんだよくそつたれッ!!」

見てるか、見てるんだろうカミサマ
幾度と繰り返されたお前の人形遊びなんかにもう付き合う義理はない
消せ、早く『ボク』を消せ

「消せ消せ消せ消せ消せ消せ消せ消せ消せ消せええええつつ
つ!!!!!!」

ム力つく程に高い場所に居るカミサマに叫んでも何一つ変わらない
世界は荒廃しきったままで、『ボク』は壊れず此処に居る

『ボク』だけが此処で、息をしている唯一のイキモノ

「ucciきしょうがッ!」

拳を地面に叩き付け、瓦礫や何かの破片で血が流れても・・・

『ボク』だけは死ねない、何時までも何時までも一人きり

(せめて壊れちまえばいい・・・壊してくれたら楽になれるのにつ)

それすらも、カミサマは許さない

「っ・・・はは・・・アははッ・・・!!」

(其処まで望むのなら・・・コロシテヤルよ、カミサマ・・・コロシテ、ヤル)

ああだけど、ただクロスのは詰まらない

『ボク』にコロシテ欲しくて『ぼく』の幼馴染を殺し苦しめ、

『ぼく』を壊れるまで追い詰めたお前を、そう容易くはコロシテやらない

「はははっ・・・後悔しろ、カミサマ・・・」

『ぼく』を壊し、『ボク』を怒らせた罪は

「死して尚滅することさえ・・・生温い・・・」

精々そこで悔やんでろ

お前は『ぼく』を傷つけるといふ許されはしないミスをしたんだ

「さあ・・・聞け、かつてこのセカイに生きたモノ共よ」

（償うことさえも許しやしないぞ、カミ・・・）

「カミが憎いか？お前たちをただ無情に切り捨てたカミが・・・憎いか？」

どす黒い靄のようなものが大地、瓦礫、死人から溢れ
それが徐々に人型を取り、『ボク』の目の前に現れる

―ニクイ、カミガニクイ―

ただただ、その言葉しか知らぬように繰り返す黒い靄
そのボロボロと零れるようにして微かに、少しずつ霧散していくそ
の様はまるで・・・

「そうか・・・なら、おいで」

（お前等も『ぼく』と同じ・・・カミを信じて捨てられ壊され・・・泣くという行為すら取り上げられたモノ・・・）

「イイ、ノカ・・・？カミハ、ワレワレヲステタンダ、ゾ？」

ありえない・・・そう分かっていても期待する幼子のように・・・諦めも期待も入り混じるソイツに、思わず笑ってしまう

「ははッ・・・『ボク』は・・・カミじゃないんだ」

（そうだ、カミなんかじゃない・・・あんな奴とは違う・・・アイツは誰も救わない）

例え目の前で大勢が病に倒れ、苦しもうとも

例え目の前で大勢が飢えに苦しみ、痩せ細り死に蝕まれようとも

絶対的なまでに神様を信じ続けた『ぼく』にした最後の仕打ちなど最早・・・

（ココロ有るイキモノですら、無い）

「『ボク』はカミを憎むモノ……」

「カミを憎み、怨み、そして……コロスモノ」

微かに、『ボク』の言葉にゆらりと目の前の靄が揺れる

それはまるで歓喜に震えたようであり、憐れだと嘆くようでもあった

「お前等は、カミが憎いか？憎いなら『ボク』に力を貸せ」

「タシカニ、ニクイ……ダガ、オマエニナニガデキル？」

最早此処は終わりを待つだけのセカイ、そこで人間のお前に何が出る？

無い筈の目で、靄は『ボク』を突き刺すように見つめる

「『ボク』は必ず……アイツが選んだ次のセカイで生を受ける」

そうだ、これが幾度と繰り返された胸糞悪いこと

『ボク』がアイツを憎む最大の、理由

「今の『ボク』の全てが、其処に生まれる『ボク』に反映される……だから、」

今此処で、『ボク』を喰らえ

―・・・ナゼ・・・ソコマデ・・・オマエハ・・・カミニ、アイサ
レタデハナイカ―

ああ、コイツ等はやはり何も分かっていない
カミに愛される・・・ソレの苦しみが、何一つ・・・

ギリツ・・・

無意識の内に、齒を噛み締める

この世で一番憐れなコイツ等といえど、憎い憎いと憎悪を滾らせど、
所詮はこの程度・・・

「・・・御託はいい・・・さっさと喰らえ」

イラついたように顔を向けると、ゆつくりとソイツ等が『ボク』の
身体を包む

その戸惑ったような感覚がリンクし、悪態の一つも吐きなくなるが
黙って目を閉じる

『愛されていたのかどうか、分からないんだ』

『愛されているものが、ウラヤマシイ』

『ねえどうして神様は助けてくれなかったの』

―あんなにも信じていたのに・・・―

頬を伝う赤い雫は、
この荒廃しきつたセカイで何よりも尊く・・・美しいモノのように
思えた

（カミは・・・誰も救わない）

ゆつくりと開いた瞳に映るのは、このセカイの終わり

（『あの過ち』以降・・・平等で有る事にしがみ付き、ただ『見る』
という行為しか行っていない）

大地が割れ、足元が崩れ・・・漆黒の闇の中、ただ浮遊感だけが存
在していた

（・・・聞こえるか、このセカイに生きたモノども・・・）

徐々に浮遊感も無くなっていき・・・意識が深く深く、沈んでいく

（『ボク』が・・・全ての穢れを受け止めよう・・・だから『ボク』
に、）

―シタガエ・・・―

全てが闇に飲まれる直前、
異物と認識していた黒い靄が同化したかのように不快感の無いモノ
に変わり

ソレに満足しながら『ボク』は・・・

全ての感覚を放棄した

逃した違和感

ねえ、カミサマ

どうしてカミサマは、とても遠くにいるの？

『・・・私は・・・誰か一人の側に居てはいけないから・・・』

ねえ・・・カミサマ

カミサマはひとりぼっちで寂しくないの？

『・・・寂しさなど忘れたよ・・・何時も、一人だから・・・』

ふうん・・・あ、ねえ、カミサマ・・・

寂しいなら、ボクがいつしよに・・・いてあげる・・・だから、お名前教えて？

・・・あ、名乗るのは、自分からだったっけ

えとね、カミサマ・・・ボクの名前は・・・

すう・・・と、意識が浮上する感覚と共に目を開く
・・・と、同時に何となく閉じて布団に潜る

(・・・まだ眠い・・・)

久しぶりにモフモフふかふか・・・としたベッド
やはり睡眠というものはこういう場所で取らないとな・・・等と適
当な事を思いながら布団に顔を埋める

(・・・ん・・・さっきの夢・・・なんだったんだ・・・)

幼い頃からああいう変な類の夢は見ていたが、成人してからぱつた
りと見なくなつた
見た日の朝は何かと眠いから・・・喜びつつも少し寂しさを覚えて
いたのだが

「・・・こんな日に・・・見なくてもなあ・・・」

無駄に高い天井を眺めながら思うのは今日の予定
確か、今日は大事な予定が朝から晩までみっちり・・・

「・・・パスしてえ・・・」

(出来るのかな、無理だろうな・・・ああ、ほら・・・)

微かに、部屋の外で怒鳴り声のようなものが響き、それがどんどん
部屋に近づいてくる

・・・正直、ある意味で騒音だよな・・・そんなことをぼーっとし
ながら考えても、恐らく頭に浮かんだ結末通り

タッタッタッタ・・・ダンッ

「ッ霧夜!!」

頭に青筋を立てた、俺の兄貴・・・瑚杖劉生がご登場

「・・・何、兄さん？」

「何、じゃない!」

（相も変わらず騒音並みの声だな・・・）

今日の予定がああだこうだとうだそうだ
永遠と話を繰り返す兄から意識を外して外を見る

（・・・いい天気だな・・・あ？）

窓の外、仲良く遊んでいる子供達の少し遠く・・・
一人で俯いている小さな女の子が居るのが見えた
じっ・・・と楽しげな子供達を見たままで動こうとしない

（・・・・・・）

「で、だからよ、今日は「今日は予定変更だ」そうそう、予定・・・
は?」

ワザと兄の言葉に被せ、彼が思考停止している間にシルクハットと

鞆を手に持つ

目指す場所はもちろん・・・

「な、おま、き、霧夜！！！」

「悪いな、俺は今少し用事出来た」

「い、今って・・・ちょ、きりっ」バタンッ！！「あだッ！！！」

・・・最後若干、何かが扉にぶつかった気もしないでもないが取り合えず、

無視を決め込みさっさと屋敷の窓から飛び降りる

「っ就任式はどうすんだよこの野郎ううツツ！！！！！」

後ろで煩い声が聞こえた気がしたが、きっと俺の聞き間違いだろう

（うん、そういう事にしておこうか、てかしておきたい）

着地と同時に走り、屋敷の5階から見たあの場所へと急ぐことにした
足が痺れたようになってるのは、カッコ悪いので無視しておきたい事だ・・・

「ああ！マジックおじさんだあ！！」

「あ！本当だマジックおじさんっ！！」

「ねっねっ、今日はどんな手品見せてくれるのっ？」

鞆とシルクハットを手に持って、

まるで深緑の燕尾服のようなモノを身に着けている俺に、子供達が群がる

ああやっぱり子供達は可愛いな・・・ほわーんとなっている俺の目に、遠くの方でやはり暗い顔をしているさっきの女の子が見えた

（・・・仲間はずれ・・・って訳でもないのか・・・）

この子供達は誰かを外したりしない

とても優しくていい子たちだ・・・だから、少し不思議に思っていたのだが・・・

（自分から離れてる・・・っていうのか・・・？）

深い思考に嵌りかけた俺を、子供達が早く早くと急かす
取り合えず手に持っているシルクハットから・・・

「はい、パーンッ」

適当に鳩3、4匹と紙吹雪を飛ばしておく

トランプ当てをしたり目隠しダーツをしたりと・・・色々とやらされたが、どうやら満足しない様子

(・・・仕方ないか・・・w；)

ある意味反則の技をして、今はとっととお帰り願おう
そう思い、静かに目を閉じ力を集中させて・・・

「こらっ！もう、貴方達！！」

突然、若い女性の声が響いた

(おっと、と・・・？)

目を開けると、髪の高い綺麗な女性が子供達に注意している所だった
「もう・・・時間が来たのに皆居ないから心配したじゃないの・・・」
「」

「う、ごめんなさい・・・」

「明菜せんせ・・・ごめんなさい・・・」

「・・・ふふ・・・いいのよ、皆無事だったんですもの・・・でも、
心配はあまりかけないでね？」

よしよし、と頭を撫で微笑む彼女
子供達も心なしか嬉しそうに笑っていて・・・

（ああ・・・美しい・・・）

心の底から、そう思った

・・・俺はこの時、彼女に見惚れていて気付かなかった
遠くの方で暗い顔をしている少女が顔を上げ、
どんよりと曇った・・・暗い悲しげな瞳の奥で、楽しげに俺を見つ
めていた事に・・・

この時俺は、全くもって気付けなかった

そしてこの事をずっとずっと俺は、後悔し続ける事になるとも知ら
ずに・・・

ただただ、優しく美しい彼女に見惚れていた

知っている結末、その中で俺が選んだ事

今日はとてもお星様、きれい・・・
カミサマがいるから、きれいなんだね

『・・・どうしてだい？』

だってね、きれいな景色は・・・おともだちと見る方がもっときれいに見えるんだって

おかあさんと、おとうさんが、いったの

『・・・そうか・・・』

うんっ

あ・・・ねえ、カミサマ・・・

カミサマは何時もここにいるけど、どうして？

『さあ・・・どうしてだろうね・・・』

カミサマも分からないんだね・・・

うーん・・・あ、そうだカミサマ

今度ボクが、いろいろつれて行ってあげる

だから、そのときはいっぱいいっぱい・・・笑ってね

「・・・・・・・・・・」

また、夢を見た

意識が徐々に浮上していくけど、身体はどんより澱んでいるかのようで・・・・・・・・ぼんやりと無駄に高い天井を見上げる

・・・天井に引っ付いているよく分からない虫には気付かないフリを・・・出来る訳もなく、立ち上がって取り合えず真下から距離を取る

「・・・なん、なんだろうな・・・」

前に夢を見てから一週間・・・
結局、瑚杖家頭首就任式は延期・・・まあ、要するに今日になったのだが

「何か・・・何かの前触れじゃないといいんだが・・・」

俺の嫌な予感はあるからな・・・
いい予感（希望的楽観思考）は見事なまでに外れるのに

「そっいゃ・・・あの子・・・」

一週間前のあの日、暗い顔をしていた少女は何時の間にか・・・
俺が綺麗な人（魅鈴さんというらしい）に見惚れている間に、居なくなってしまった
だがあれから時々・・・視界の隅に、少女の姿が時々ちらつくのだ

まるで・・・まるで・・・・・・

「ゆ・・・幽霊・・・だったり?」

口に出して後悔した

滅茶苦茶怖い、ゾツとする、寒気が・・・

バンッ!!

「ひっ?!」

「うおーいきろおっ・・・と、起きてた・・・って、あ?」

相変わらずノックなしでのご登場どうもありがとう
お陰でとてもとても・・・

「びびったじゃないか糞兄貴ッ!!」

「うおッ?!」な、何か悪い」

何が悪いのか絶対分かって居ない駄目兄を取り合えず睨みつけた後、
掛けてあった服を手に取りさっさと着替える

「・・・で、今日の予定は?」

「あ、お、おう」

(・・・こんなんでお前本当に秘書務まるのか・・・?」)

喉元まで出かかった言葉を飲み込み、あたふたとメモを取り出す兄貴を着替えながら見つめる

・・・が、中々見つからないらしくぺらぺらと捲り続けて・・・

(・・・おい、俺の着替えの方が早いってなんなんだよ；)

いい加減突っ込みたい・・・が、俺は大人だ、空気は読める故に黙して語らず・・・にも限界があるんだがな俺が少しイラツと来ていると、駄目兄はようやく見つけたらしい

「あ、あつたあつた！・・・今日はこれから・・・就任式して、何か大事な話があるんだとさ」

「ふーん・・・分かった」

ニコニコと、何故か褒めて褒めてと言いたげな表情にお前は俺の兄だろ、と思ったが取り合えず・・・

「急ぐから俺、じゃあこれで・・・」そう告げ、扉に手をかける

俺の後ろの方で若干しゅんとなっている駄目兄に、本当駄目兄だな・・・なんてことを思いながら

「・・・よくやった」

それだけ呟き、小走りで部屋を飛び出した

「つつつ・・・やったあああつ！！！！」

少し遅れて聞こえた兄の大声に・・・ああやっぱり駄目兄だな、そう再認識しながらも、悪い気はしなかった

「・・・御爺様・・・瑚杖家次男霧夜、ただ今参りました」

真つ暗な大きな部屋・・・

いや、最早蔵と言った方がいい場所で、杖で身体を支えている老人に声をかける

にたあ・・・と、俺が大嫌いな笑みで振り返るソイツの名前は、瑚杖賢蔵

現瑚杖家頭首・・・言う事を聞かなくなった父を・・・実の子を殺した、狂った妖怪のような爺

「ふむ・・・少し遅いのお、まあ大方劉生の伝達が遅れたんじやろうが・・・あやつも役立たずよのお・・・あやつが瑚杖の名を名乗っておるの自体が恥じゃわ」

クカカカツ・・・と、しわがれた、欲に塗れきった・・・

不快感しか抱かない笑い声を上げ、俺の兄貴を愚弄する

優秀じゃないものは、要らない・・・胸糞悪いその思想に同意を促すように俺を見るから、黙って思いつき睨み付けてやる
思ったとおり、臆するどころか・・・

『瑚杖を継ぐに相応しい顔になった』

そう言いたげに、爺は満足気に笑う

「カカカツ怖い怖い・・・さて霧夜、今日此处にお主を呼んだ理由くらい知っておろう？」

「・・・就任式だと、聞いておりますが」

俺の言葉を、爺は笑い飛ばす

ああやはり裏があつたか・・・睨む事もいい加減疲れたので、無表情で返すと余計嬉しげな顔になる

(・・・変態糞爺が・・・)

「・・・御爺様、用件を教えてくださいたら嬉しいのですが」

「クカカカツ・・・用件は他でも無い、お主には瑚杖家代表としてある戦に挑んでもらおうと思つての」

「・・・戦・・・ですか？」

「そうじゃ・・・選ばれたモノだけが参加し・・・殺し合い・・・証を奪い合うものじゃ」

ニタニタと笑いながらそう言う爺を、殺してやりたいと思ったのはこれで何度目の事か・・・

拳を握り締め、恐らく爺が言つてあるう言葉を遮るように俺は、

「・・・承知しました」

ただ静かに・・・腐りきつたその目を睨んだ

そんな俺に意外だ、とでも言いたげな表情をするが、目は・・・初めからわかつていた・・・そう、告げていた

「意外よのお・・・まあよい、お主がやらぬなら劉生にでもやらせようと思つておつたが・・・助かるわい」

（やっぱりそうか・・・）

先に了承しておいて良かった

劉生じゃ、必ず死ぬだろう・・・まあ俺も人の事が言える身分でもないが・・・

「・・・御爺様、その戦について詳しくお話頂けませんか？」

今は仕方がない・・・従うしかない

自分自身にそう言い聞かせ、握り締め過ぎて白くなっている拳を更に・・・握り締める

微かにチクリツと、痛みを感じたがそんなことは意識から除外する黙つてその様子を笑いながら見ていた爺の真後ろから、凜として透

き通るような声と、楽しげな声が突如響いた

「ご説明は、我等が行いましょう」

「うんうんー、ボク達がしたげるー」

顔を上げて見たのは、帽子を被った白銀の髪をした子供二人組み
同じ服と帽子・・・黒と白と、色だけが違っていて、同じ顔をして
いた

注意してよく見れば若干違うが、ぱっと見全く同じの顔に正直戸惑う

「そうじゃ、此度の戦でお主をサポートする二人じゃ・・・優秀な
双子での、ほれ、挨拶するのじゃ」

黒い服、帽子を被った・・・透き通る声の持ち主が、優雅に一礼する

「初めまして霧夜様、私はレイシス・・・レイシスⅡシャルティオ
ン・・・レインとお呼びくださいませ」

感情を持って居ないかのような赤い瞳と目が合う

美しい・・・まるで宝石のようで、そんなものには興味など無いの
に・・・魅入られたように、目が逸らせない

「はいはいはい、ボクはね、ティーシャ♪ていむんどⅡしゃるて
いおんー」

呆けたようになってる俺に、レインの前に立ちほだかるかのように手を上げながら白い服、帽子を被った彼が言う

本名はあまり言い慣れてないのか、上手く言えてないような気がしたが取り合えずスルーする

「・・・御爺様、これは？」

「旅好きのお主のこと・・・何も知らぬであろうからの、ワシがこの二人をアシストに選んだのじゃ」

「・・・・・・・・・・ありがとうございます」

「クカカツ、気にするでない・・・お主には此度の戦・・・ワシの思惑通りの働きを期待しておるのじゃからなあ・・・それじゃあ、アシスト達と仲良くの」

「・・・・・・・・はい」

去っていく背中をただただ黙って睨んだ

『今は、ただの人形のように振舞うのが得策だと・・・』

それは瑚杖家の次男に生まれてから、学び続けてきたことだった

『耐え・・・そして機を待ち、逃さず』

母親だった人が、爺に殺されるまですつと・・・
幼かった俺に何時も言い聞かせてきた言葉

あの人の死を、父の死を無駄になどしない・・・曲りなりとも、俺は彼らを愛していたから

だから、彼らの愛の結晶である・・・劉生だけは、守ってみせる

どれだけ穢れようと、どれだけ罪を被ろうとも彼だけは・・・

「・・・霧夜様」

ふと、やんわりと手を触られる

「・・・レイン・・・だったか・・・？・・・どうした？」

「あらー・・・ますたー気付いてないみたいだねー」

とことこ、とティーシャも近づき、俺の手を握り・・・

「ほらー」

俺の目の前まで、上げる

その時・・・自分の手を見て初めて気付いた

握り締め過ぎていた手は、赤く滲んでいることに・・・

「・・・握り過ぎてたな」

「手当てをします」

「いや・・・放つとけば治る」

「だめだめー、ねーさんの手当てはとっても効くんだからー」

にぱー、と無邪気に笑うティーシャになんとも言えず・・・

困惑しているとレインが黒手袋を外し・・・するりと、素手で傷を撫でる

「っ、・・・あ？」

ピリッ・・・と微かに感じたが、レインが触れた手を除けた瞬間・・・
其処に傷は何も無かった

「ね、ねっすごいでしょ、ねーさん治すの得意なんだあ」

「・・・私の力をご覧の通り・・・触れるモノなら復元する事が出来るのです」

有事の際は、何時でも御言いつけくださいませ

そう言つて一礼するレインと、

無邪気にすごいでしょすごいでしょ、とはしゃぐティーシャに思わず・・・

ポンッ

「っ？」

「わっ？」

衝動のままに頭に手を置きそのまま、なでなでなで・・・
ふと、しばらく経って・・・あ、またやっちまった・・・
少しだけそう思っ、て、ああ戦の事とかアシストとか色々聞かないと
な・・・と思っただけ、

「・・・・・・・・／／」

「えへへー♪／／」

気持ちよさそうに喜んでいる二人を見ているとどうでもよくなっ
てきた

爺は相変わらず腐ってるし兄貴は駄目駄目だし少女は何だか怪奇の
カテゴリーにINしてるし・・・まあ、魅鈴さんは綺麗だったけど・
・

良い事が無いような気がしていたここ最近・・・とても久しぶりに
癒された

これから先のこと全て・・・

恐らく泥に塗れたように、底なし沼に絡め取られたように、
ただ汚れて沈んでいくしか無いのだと・・・

頭のどこかで分かっていたけど、今はまだ、確定では無いと言い聞
かせ・・・

何処かにある道を歩んで行くのだと、この時俺は、俺の意思で選んだ

・・・恐らく、何よりも誰よりも実現困難な道を・・・望み、選ん
でしまった

けど不思議と・・・

結末が目の前に迫ってこようと後悔は無かった

何一つ、後悔など・・・しなかった

それが俺の唯一・・・胸を張って誇れる事実・・・今も昔も、これ
からも・・・きつと・・・きつ、と・・・

第0話：望み抱きしモノ達

ねえカミサマ？

どうして人は争い合うのかな、皆同じ命あるモノなのに

『・・・望みを持つからだよ』

望み・・・？

ねえカミサマ、それは命よりも大事なモノなの？

誰かのシアワセよりもずっとずっと・・・大切なことなの・・・？

『そうだな・・・そのヒトじゃないと、分からないよ』

そう、なんだ・・・

とってもとっても、悲しいね

皆皆、シアワセになろうと戦い合う

大切なものは、ずっとずっと・・・初めから側にあるのにね・・・

何が・・・かは分からない

だけど、心の底から悲しいと思った

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

月が雲に隠れている

真っ暗な部屋の中、ゆっくりと目を開けると見たのは見慣れた天井で、

だけど何時もと違って、かすんで見えた

(・・・胸が・・・)

理由なんて知らない、知りたいとも思わない
けど今、俺は・・・

「すごく・・・胸が、痛い・・・」

よく分からない何かを悲しみ、静かに泣いて・・・また目を閉じた

ヒトは死ぬと星になるという

馬鹿げた話・・・ただの子供騙しなのに、

ウソだと思いながらも今日が曇りでよかったと、本気で思った

(殺し合いに参加する証を刻む所なんて・・・)

「母様に、見せる訳にはいかんからな・・・」

「・・・克哉様は、優しいのね」

自嘲気味に呟いた独り言に、女の声が返ってくる
目を向けなくとも分かるその、艶やかな特徴ある声の持ち主は、

「・・・イリス・・・」

この戦で僕のアシストを務める女性・・・イリス＝アンディーヌ

「驚きね、栢山家次期頭首様がこんなにもお優しいなんて・・・この戦には向いてないわ」

早々に殺されて印を奪われ戦敗退・・・かしら？
妖艶に笑いながら彼女は僕に近づき微笑む

「・・・そうかもしれない」

「あら、意外と謙虚なのね」

意外・・・と言いつつも、彼女は笑みを絶やさぬまま
さすがは栢木家御用達の何でも屋といった所か、恐らく全て調べ済みなのだろう

僕が黙っていても着々と刻印を施す準備を進める

「・・・イリス、アシストは何のメリットがある？」

「あら、貴方でも不思議に思ったりするのね」

若干失礼な台詞を返す彼女に思わず・・・

僕は冷徹非道鬼畜悪魔・・・辺りだと思われているのだろうか、と
なんとも言えなくなる

(・・・そもそも、気にならない奴が居るのか?)

アシストは今回の戦で、契約したマスターを守る

途中でマスターを殺されればアシストは死ぬ、それから解放される
のは勝利しかない

しかも・・・この戦は、勝つ為には必ず相手のアシストを殺めなけ
ればならない

アシストを殺めて初めて・・・殺したアシストのマスターの証を奪
い取る事が出来る

そういう、『ルール』なのだ

「・・・自殺願望でもあるのか？」

「あらやだ、私そんなのなんて無いわよ・・・そうね・・・強い
て言うなら、貴方が死ぬ所を間近で見たいから、かしらw」

「・・・悪趣味この上無いな」

「ふふ、褒め言葉ね・・・でも私、他のヒトに貴方の死に顔見せ
たくないのよね」

その程度には、私貴方を愛してるから

クスリツ、と・・・悲しげにイリスは笑った

その笑い方が、この世から居なくなる直前の母様と同じで・・・
こんな笑みは、他の誰にも見せたくないな・・・と、ぼんやりと思
つて、

『コイツの死に顔を誰にも見せない為に生き残ろうか』

生き残った後の、カミの祝福―どんな願いでも一つだけ叶えるとい
う子供騙しのようなもの―など興味の無い僕は・・・

彼女と同じ・・・後ろ向きの決意を胸に、
悲しみ、苦しみ、憎しみ、怒り・・・負の感情しか生まれない死の
舞台で二人、踊り続ける役者になろうと、僕は静かに心に誓う

暗闇が支配する外と打って変わって・・・

あるホテルの一室では可笑しな光景が広がっていた

「いやー・・・あのさ、私間違えて刻印付いちゃったんだよねw」

ひらひらと刻印の付いた手を振り、笑う俺の主・・・琴宮家代表、

琴宮圭二様

その隣に幼馴染（失礼ながら俺から見て、どうやら圭二様にほの字のよう・・・）江月空乃様

お二人にお会いしたのは今日が初めてなのだが・・・何故彼が（間違えたにしても）マスターになっちゃったのか激しく疑問である

「だからね、うん、私戦えない訳ですよはいw」

「そうなのよ、このヒトだったらほんとと頭も悪くて運動神経もなくて・・・あたしが居なきゃ駄目駄目なのよ」

「は、はあ・・・」

（何なんだろう・・・いや、マジで何でこのヒト選ばれたんだろう・・・）

刻印は、候補となるモノの中で一番強い願いや思い・・・それを持つているヒトに反応し、刻印に選ばれたそのヒトにしか現れないし付かない

主のご家族は皆・・・言い方は悪いがかなり貪欲で、刻印を喉から手が出るほど欲しがっていた

それを押し退けるほどの願いが主にはある・・・筈なのだが

「って空乃、私駄目じゃないよ、きっと出来るよきつとさ」

「きつとき、じゃないのよ！それで怪我したのどうするの?！」

「うーん・・・そうだ、空乃に手当てしてもらっ」

「え、あ・・・／＼た、頼ってくれるのは嬉しいけど・・・その・・・／＼」

恐らく本人無自覚だろうが、いちやついている
空乃様は真っ赤になって俯いてしまった

（・・・何なんだろう・・・ほんと、刻印さん間違えたんじゃないのか・・・？；）

絶対ありえないであろう事を考えて現実逃避してみるが・・・
やはりなにも代わらない

「・・・主」

「ん？なに、ランラン？」

「ら・・・；・・・主、私は葉山蘭時・・・という名前なのですが・・・；」

取り合えず控えめに呼び名について意見してみる
すると、主は満面の笑みで、

「うん、らんじ、だからランラン」

いい名前でしょうと、得意げに笑う

・・・本気で、パンダかなんかと同レベルなのか俺は・・・と、悩
んでしまったが恐らく主には通じまい

もういい、呼び名の件はこの際気にしない・・・今は諦めるしかない

「・・・これはまたの機会にします・・・主、貴方様はなんの為にこの戦を戦い抜くおつもりですか？」

これが分からなければ、守るにも守れない

アシストである以上、恐らく主より先に死ぬのだろう（主が先に死ぬなどもつての他）が・・・

（せめて自分がどんなヒトを守り、尽くすのか知りたい）

どんな時でも、思いも望みも主と共に・・・

それが葉山家の家訓であり、それが、

騎士としての自分の誇り、守る力の根源

そう思い、主の言葉を待っていると、

考えているかのような、唸り声が聞こえ・・・何故か、空乃様を寝室へやんわりと押しやり

・・・そしておちゃらけていた雰囲気が無くなり、主は言う

「・・・そう、だね・・・私はね、ブチ壊したいんだ」

一瞬、冗談かと思った

だけど顔をあげて見たのは、真っ直ぐな・・・あまりにも真剣な顔の、俺の主

「たった一つの願いの為に、大勢殺して良しとするのか？それは可笑しい」

それが許されるのなら、戦争でもなんでも起こりまくって私なんて此処に居ない・・・微かに、主が笑う

今までの騒がしさやふざけた態度がウソのようなその笑みに、俺は目が逸らせない

「そもそもこれは何だ？カミの祝福を受けるただ一人の選別だろう・・・ならカミは殺し合いを望んでいるのか？そもそもカミとは・・・なんだ？」

カミ・・・と言われるのは、全知全能で・・・

誰にも等しくその愛を与えるとされる、誰も姿など見たこと無い存在まるでそれはただの偶像のようで・・・だけど誰もが信じ、居る事が『事実』として浸透している・・・其れは、一体何なのだろう？主の問いに俺は答えられないまま、トキが過ぎる

「・・・ふふ、あはは!!」

ふいに、静かだった空間が主の明るい笑い声で掻き消される意味が分からず主を見れば、彼は優しげに笑っていた

「すまないね、変な話をして・・・要は、私は『殺し合いなどするつもりはない』のだよ」

「と、言いますと・・・？」

「私は昔から、謎解き探偵になりたかったんだ」

何となく、無邪気に笑う主を見て分かった

主は、この戦いを終わらせるつもりなのだ・・・

カミと呼ばれている何かが続いているこの、繰り返されてきた死の舞台の、幕を引く

それが主の、強い望み・・・

「・・・いいでしょう・・・主、俺は貴方を守ります」

「はは、私より空乃を頼むよ」後、そうそう・・・君は私に、夢を見させてくれないか？」

「夢・・・ですか？」

「そう、夢」

主がまた、子供染みた表情から大人の表情になる

そして、持ってきていた鞆を漁り・・・何かの本を取り出し俺に向かって投げる

「・・・これは？」

「・・・私の、ヒーローだよ」

『。。。の騎士』 そう書かれたその絵本は、何度も読んだのかぼろぼろだった

「君には・・・そんな騎士になつて欲しい」

血に濡れた舞台で戦う戦士ではなく、誇り有る騎士で・・・居て欲しい

主の言葉に、俺は静かに・・・笑った

「貴方様の仰せのままに・・・我が主よ・・・」

誰よりも何よりも優しい俺の主が、心底嬉しげに笑った
その笑顔を守り抜く・・・命を賭けてでも、やり抜きたい・・・いや、やり抜くのだと、今この時・・・俺は心に固く誓った

第1話：ゆつくりと歩き出すように

始まった

血に濡れた舞台が、遂に始まってしまった

レイスやティーシャが集めてくれた情報によると、参加者は俺を含めて九名

前回より一人、刻印に選ばれた犠牲者が少ないようで・・・

（ああ殺す人数が少なくて助かった・・・）

本気で、俺はそう思った

元々物騒なことは好まないが、そもそも・・・俺の『特別』と呼ばれる力は戦いに不向きなのだ

瑚杖家の特性は『幻影』イリュージョン

幻を見せ惑わしその隙を突く・・・なんとも卑怯な力

（俺はそれが嫌で・・・この力を使ってマジックなんてしてたんだよな・・・）

俺の手で生み出される全ては幻影

されど、見るものにとってそれは『真』ファクト

だから、キライだ

幻に酔いしれる人々を前に俺は、ただただ冷たい所に位置するだけで彼らと同じユメには酔えやしない

何時も何時も、独りきり・・・騙し続ける道化でしかない

「・・・霧夜様・・・大丈夫なのですか・・・？」

「まーすーたー？」

ふと、顔を上げると心配げな二人と目があつた

何となく・・・俺は気付かれないように（とは言っても力の発動時、能力者は例外無く瞳の奥が能力固有の色に染まるのだが・・・）力を発動させてみる

すると、二人は目を逸らさずに・・・

「・・・霧夜様、大丈夫ですよ」

「えへへ、ますたー・・・ボク達ね、ますたーと同じだよ」

俺より10以上離れているというのに、安心させるように笑う二人
もしかしたら爺はこれを見越していたのかもしれない
見越した上で、この二人を俺の元へ・・・

「・・・そうか・・・お前等で、良かったよ」

「・・・まだまだ、満足するにはお早いですよ・・・何でもお申し付けくださいませ」

「そうそう、ませ、ませー」

誰でも簡単に、ユメに引きずりこめるこの力・・・

その俺の力が遠く及ばないこの二人がアシストで、本当に良かった

ようやく、『特別』だという壁を作らず居られる場所を・・・見つけたような気がした

「さて・・・それじゃ、まず飯食べるか」

屋敷を出る前、劉生に貰ったお弁当を取り出し俺が言つのと、三人のお腹が鳴ったのはほぼ同時だった

「つくつく・・・」

「ふふっ」

「あははっ」

異常な舞台で異常なく振舞えるほど・・・

普通では無い俺達は、暗い洞窟で可笑しいくらい・・・明るく楽しげに、笑い合った

「・・・柏木家は・・・なんて罪深いんだろうな」

役目を果たしたらしい、毘達の下へ歩むとそこら中に血や肉片が散らばっていた

始まりの合図が鳴り響いたその瞬間、誰かは分からない男達三人が屋敷に乗り込んで来た・・・との報告を受けたのだが、どうやら正しかったらしい

・・・まあ、僕の元へは辿り着く事無くこの有様だが・・・

「ふふ・・・なあに？残ってる良心でも痛んだのかしら？」

「まさか・・・そんなものがあるなら、力の苗床にしているさ」

「それもそうね、貴方様の力はそういうモノだし」

軽く言つてのけ、イリスはベルを鳴らし使役物を呼び出す

「・・・君のソレは有能だけどなんとも言えないモノだな」

「あら、褒めているのかしら？」

呼び出されたソレは、『手』だ

ぬいぐるみのようなもの、ヒトのようなもの、熊のようなもの……
兎に角、様々な手

「……悪趣味だ」

「ふふ……まあ、本来は身体もちゃんと呼んであげるのよ？」

でも今は、あの子達の体汚したくないの

そう言う彼女は少し悲しげで……ふと、手は体じゃないのか……
と思ったが飲み込んでおく

見慣れているとはいえ、彼女の『人形使い』^{バベティア}の力は異様だ
初めて見た時はしばらく……いや、まあこれは思い出さなくていいだろう

手だけが宙に浮いて、雑巾やら箒（どうやらついでに掃除するつもりらしい）を使っている様子はなんとも言えないものがある
黙ってそれを見ていると、同じく黙ってみていた彼女が……

「私の『子供達』^{バベット}は優秀なのよ、とっても」

と、呟く

横顔を伺い見ればほんの微かに、淡い青紫に瞬く瞳は憂いを帯びて
いて……

「だから、克哉様・・・貴方様は、限界まで戦わないで・・・優しい優しい、貴方様のままでいて・・・」

その為ならば、私の命なんて惜しくもないの

そう言い顔を上げた彼女は縋るようできて・・・
息を呑むほど、美しい

この世に彼女と僕しか居なければ良かったのに

ほんの少し、残している彼女への心がそんな事を呟きかけるから・・・

・
恐らくこの先、二度と言えないであろう言葉を一つ・・・消えない前に、彼女に残した

「

」

イリスは微かに驚いて・・・少女のように、笑った

ドカーンッ

・・・取り合えず今の現状を表すには此れが一番最適だろう
なんて馬鹿な事を考える程度には、どうやら私は余裕があるらしい

「っ主!!」

「圭二っ!!」

もくもく・・・と煙が上がるホテルの一室（か、どうかも分からないんだなこれがw；）に響くのは無事なようで安心出来た聞き慣れた声と、

「ケツ、琴宮家代表はこんなひよろいのかよ」

無駄に体格のいい熊のように毛むくじゃらの見た目不潔・・・ゲフンゲフンッ、大男さんの声
・・・大方アシストでさえ無いだろう、刻まれた証が疼かないという事はそういう事だ

（ああ・・・なんだか先行き悪そうだね、これは；）

目だけで自身の体の無事を確認した後、二人を探そうと立ち上がる
と同時に・・・
みつともなくよろけて、空いている隙間（乱入者が壊したホテルの壁）から外へ落ちるように飛び出してしまった直後、

ダンッ!!

大きな大きな赤い斧通過する

（つて、危なっ！；一瞬遅れてたら私此処で真つ二つ・・・って・・・）

ああ、大変な事を忘れていた

此処はホテルの最上階・・・12階だった

重力に何時でもどんな状況でも従順なこの体を憎んだのはもう何回目
の事か・・・

ああどうしてヒトは空を飛べないんだろう？

そんな事を久しぶりに考えてみながら・・・

勝利を確信して笑っている大男さんに微笑みかけてみる

すると思ったとおり、怪訝な顔をした大男さんが私と・・・目を、
合わせた

「っ主、主何処ですかっ！！」

突然ホテルの壁を破壊してきた乱入者

主の言いつけ通りまず空乃様の安全を確保した後、すぐさま部屋に
戻るが煙が充満していて何も見えない

（まさかそんな、まさかつまさか主はっ・・・）

「っ・・・主二様あああつつ！！！！！！」

我を忘れて叫んだと同時に、
微かに何かが起き上がる音と、ひゅー・・・ひゅー・・・と、か細い呼吸音が聞こえた

「っ主?!主、何処です?!返事をしてくださいっ!!」

中々晴れない煙の中俺が叫んだ直後

「・・・グチャツ!!」

何かが固いものに叩きつけられ潰れたような音が、耳に飛び込んできた

（ま、まさか・・・）

ただ呆然と空いている壁へと近づき・・・下を見て地面にあったのは

「っ!!」

真っ赤に潰れた死体
遠目では誰か分からないが、夥しい量の血と飛び散った内部からしてまず死んでいる

「あ、ある・・・じ・・・」

（ああああ・・・なんてことだ、俺は・・・俺は守るべき主をみすみす・・・）

「・・・・・・っ・・・おー・・・い・・・らん、らん・・・」

騎士としての恥

主を守れず、誓いを立てた直後に破るなど・・・しかも幻聴まで聞こえてくる

「主、主っ・・・お許しくださいっ」

「だ、だから・・・ランライン・・・w」

「ああ主っ、貴方様を守れないばかりか幻聴まで・・・」

なんと言う恥知らず

自らの罪から目を背けるなど最早騎士の風上にもおけない

（そうだ、もう死ぬしかない・・・主、貴方様の下へ行く俺をどうかお許しください・・・）

常に携帯している自害用の短刀を手に取り、首へと当てた直後、

「っ止めないか葉山蘭時ッ!!」

主とまったく同じ声と共に、
シュンッ・・・と、短刀が俺の手から一瞬にして消えた

「あ、な、な・・・」

言葉も出ない俺の元へ、髪が乱れボサボサになっている主が現れる

「あ、ああああ主?! な、何故主が・・・あ、あああ・・・俺は
なんと罪深い・・・幻聴だけでは飽き足らず主の幻覚までっ・・・」

「幻覚な訳あるかつ!! ;て、その前に私を勝手に殺すんじゃない
!! ; ; ;」

何故か消えた筈の俺の短刀を手に持っている主がそれでべしべしと
叩いてくる

(い、痛い・・・? ;ってことは、これはユメでも幻でも無く現実・
・・・?)

お説教モードに入っている主がまだべしべしげしげし・・・と、軽く
叩いたり蹴ったりしてくるがそんな事気にならない
正直俺はそれどころじゃない

「っ主!!」

「だからね、私はつてうわ?!」

短刀が何故消えて主の手にあるのか、乱入者はどうしたのか、そういえば空乃様を安全地帯に置いてきたままだ・・・

と、それら全てを置き去りに俺は主の無事を確認する為勢いよく駆け寄り・・・

当然止まれるはずが無く、押し倒す形になってしまいがそんなことはどうでもいい

「主、主っ・・・痛む所はありませんか?!」

「ランランどうし・・・って、まあ痛い所はないよ、うん」

主は安心させるように笑うが、唇の色がどうも悪い

失礼ながら触診で色々と検査してみた（主は始終くすぐりたいと苦笑していた）がどうやら無事なご様子

はぁ・・・と、思わず脱力しながら息を吐いていると

「あ、ランラン・・・空乃は何処？」

「あ・・・あの、安全地帯へと・・・その・・・」

置いてきました、とも言えずもっているといきなり扉が

バタンツ！！

「圭二、蘭時さん大丈夫?!」

開き、噂の空乃様が入ってきた・・・が、何故か俺達を見て固まる

(・・・・・・・・?)

「・・・・・・・・えと、空乃・・・・・・・・?」

少し頬を赤くし、むくれたように俺達（特に俺）を睨む空乃様に・
・

ああ、主の上に乗ったままだったと思い出し・・・・って、

「あ、あああ主すみません申し訳ありませんっつ!!!!!!!!!!!!」

主の上に乗っかるなど侮蔑の極み、
勢いとは言えなんと愚かしい事を俺はしてしまったんだ、これはもう死んでお詫びするしかっ・・・・て、

「あ、あれ?」

咄嗟に腰に手を触れてみると、短刀の感覚があった
何時主は返したのだろうか?ふと、そう思った時主が悪戯っぽく笑

った

「私の、力だよ」

それも・・・そして、アレも・・・

アレ・・・

そう言った時一瞬、笑みに不穏なものを混じらせて主は言い・・・
色々と混乱して動けない俺の下から這い出す

「空乃、無事だったのかい?!」

「え、ええ圭二・・・蘭時さんに安全な所に移動させてもらったから・・・って、圭二こそ大丈夫なの?!力使ったって、あんまり使っちゃ駄目だって言ってるじゃないの!!!」

「あ、あはは・・・まあ、うん・・・てへ」

「てへ・・・じゃ、無いのよ全く!!!」

空乃様の怒ったような声にようやく長い混乱から戻ってくる事が出来、主達を振り返る

・・・何気に空乃様にばしばしっ、と主が叩かれていたが取り合えずスルーする

「・・・主、主の力は・・・一体・・・」

「・・・私の力は『^{ブランド}略奪』何でも奪い取る取ることの出来る、能力さ」

「略奪・・・？」

「そう、略奪」

ニツコリと笑いながら、主がゆっくりと目を閉じ・・・開く
微かに、瞳の奥が深紅に染まって・・・その目と、俺の目が合った
瞬間

シュンッ

「え、あ、あ？」

「ちょっと圭二聞ってるの？！って・・・え、蘭時さん？！」

先ほどまで主の居た所に、何故か俺が居て・・・
俺が居た所に主がいた・・・場所が、入れ替わった・・・？

「っ・・・こーんな、感じ・・・っはあ・・・はあ・・・っ・・・
あー・・・」

「っ主？！」

「け、圭二！！」

ガクンッ、と体から力が抜け座り込む主
慌てて駆け寄るとさっきよりも顔色が悪い・・・まさか、主の力の
対価は・・・

「・・・っ・・・私の、力・・・ヒトとか・・・っ・・・意思のあ
るもの、動かすと・・・はあ・・・酸欠、なるんだよ、ね・・・」

酸欠はキツイよねー、などと苦笑している主に空乃様は常備してい
たらしい酸素ボンベ？のようなものを渡す
少しそれを吸った後、心なしか顔色のよくなった主は俺を見て笑う

「びつくりした」？」

「そりゃ・・・びつくりしましたよ・・・主、貴方様は戦わない
でください」

「え、戦力外通知?!」

そんなあ・・・といった顔の主に思わず苦笑してしまうが、ふと思
いついた事を言ってみる

「主が亡くなったら、俺後追いますからね（てか確実にルール上
死ぬし）」

「あ、あたしも後追うんだからねっ!!」

高らかに後追い宣言を二人からされ、さすがに主は焦り気味の様子
あー、やら、うー、やら唸った後、苦笑しながらサポートだけにす
ると約束してくれた

「一先ず安心しました・・・あ、あの下にある死体はどうすべきで
しょう？」

「んー・・・あれはもう気付かれるだろうから、空乃お願い♪」

「分かったわ、任せて♪」

空乃様は笑いながら部屋を見渡す

何故かは分からないが、主に部屋の外に出るように促され・・・出
る直前、空乃様を見ると、

微かに、瞳の奥が淡い青に煌いていた

五分ほど部屋の外で待っていると、空乃様と主が仲良く出てきた
・・・どうやら空乃様の力には俺と同じく、対価が要らないらしい・
・・・何時も通りの様子だ

「おまたせ♪空乃の力は『カモフラージュ偽装』なんだよ、だから・・・」

自殺したように、見せかけた

主の無邪気なその笑顔に、

ほんの少し寒気のようなものを感じたが取り合えず無視する

何となく、ここに来て主の事が少し分かった気がした

主は、好戦的ではない・・・逆に戦うのを嫌っている

けどその反面・・・刃向かうものや誰かを傷つける可能性があるものは容赦なく、消す

それが、主のやり方なんだろう・・・

「って、ランラン聞ってるw；；？」

「あ、は、はい・・・申し訳御座いません；・・・それより主、ランランというのはちょっと・・・」

（さすがに、他の組の前でその名で呼ばれたら・・・騎士、として・・・；）

確実にふざけてんのかこいつ等
と、いうことになるだろう・・・そもそも、パンダと似たような名前では正直、気が抜けてしまう

「・・・じゃあ、ランランが圭二って呼んだらいいよ」

「な、え、め、滅相もございませんっ！！；」

慌てて俺は言うが、空乃様が・・・

「・・・諦めなさい、ランランが嫌なら、それくらいはしないとw」
と、少し意地悪な事を言ってくる

もしかしてさっきの仕返しだろうか・・・可能性が高すぎる事を考えながら・・・諦めた

「・・・圭二様・・・」

「お、そうそう♪偉い偉い、蘭時偉いぞー♪」

何故か上機嫌になった圭・・・もとい、圭二様になでなでされ・・・羞恥に苛まれながらも自分が仕える圭を少し知れたことで・・・悪い気は、しなかった

そして・・・

「今度からホテルを拠点にするのは止めよう、迷惑かけちゃうし」
何故か初めから分かりきっていたことを再確認し、誰も居ない廃工場のような所に潜伏する事にした俺達であった

先行きは・・・不安・・・過ぎるほどでは、無いのかもしれない

第2話：悲しげな瞳（side?）

暗い・・・

何も、見えない・・・漆黑・・・闇ノワール・・・

（起きているのか、俺は・・・？）

まるで意識だけのようで、自分の身体を見ることさえ叶わない
ただあるのは果てしない闇だけ

（・・・・・・・・・・）

取り合えず、身を起こす

ふと、闇の中から徐々に何かが集まり・・・少女の姿を形作る
ゆっくりと開かれたその瞳の色は、深淵・・・

（君は・・・あの時の・・・？）

全てが始まる一週間前・・・

瑚杖家頭首として選ばれ、アシストのあの双子と出会っ一週間前に
ただ一人で暗い顔で俯いていた少女

言葉、は出ないが俺の思っていることが分かったのか少女は微笑む
そして・・・

□

□

唇を小さく動かし、笑った

ぺちっぺちっ

軽く頬に何かが触れたり離れたりする感覚を感じながら、重い体が徐々に覚醒していく

・・・頬に触れる何かが案外強い衝撃だという事に気付いたのはその辺からで・・・

「まーすーたーあーあーあー・・・」

お腹すいたー・・・と、

これはティーシャの声だな・・・そう感じたのもその辺から

「・・・ティーシャ、痛い」

「あ、ますたー起きたあ」

俺が起きたのを確認すると、ニコニコと笑顔で平手をするのを止める
ああ、どうりで頬が痛いと思った

「あ・・・ティーシャ、レインは？」

「んー？あ、あのね、ねーさんね、ていさつーっていつの行った・
・ボクお留守番、ねえ偉い」？」

目をキラキラと輝かせていうティーシャに、
どこその馬鹿が被って見えたのは・・・気のせいと言う事にしてお
こう

そう結論付け、取り合えずよしよしと頭を撫でる

（・・・嬉しそうな所までそっくりだ・・・此処まで来てもあの馬
鹿の影は俺に付き纏うのか・・・）

しつこいと嫌われるもんだけだな・・・

そうは思いながらも何処か落ち着けている事实に、馬鹿は馬鹿でも・
・・やっぱり兄だな・・・と、思わず笑ってしまった

『偵察』に行ったらしいレインが帰ってくるまでに飯の準備でもし
ようか・・・

そう思い、ティーシャと一緒に薪を拾っていると、

ズキツ・・・

「っ・・・」

（刻印が、疼いた・・・？）

右目に施した刻印が警告するかのように、疼いた

「ますたー？おめめ痛いの？だいじょぶ・・・？」

心配気なティーシャが、俺の視界に映つたと同時にもう一つ、ギリと何かが映つた

「っティーシャー！！」

「わ、えわあ？！」

咄嗟にティーシャを突き飛ばし俺が反対側へ飛ぶと・・・

グサツグサグサグサツ！！

一拍遅れてツララのようなものが大量に、さっきまで居た場所に突き刺さる

「ティーシャー！！森の中入ってる！！」

開けた場所に出れば確実に蜂の巣・・・

俺はともかく、ティーシャがそうなるのだけは避けたい

俺が叫ぶのと同時に、ティーシャの姿が森に掻き消されるように見えなくなる

「ちっ・・・」

舌打ちのようなものと同時に、まだ刺さったままのツララが全て溶け・・・

（っあそこか?!）

積み上がった岩の上に一人の青年が居た
切り裂かれたように服が破け、体中傷だらけ・・・特に、右腕が酷い
そいつの血に塗れた右手に見えた刻印の色は、黒・・・恐らく誰か
のアシストだろう
そいつはそのまま、じっ・・・と辺りを警戒し、

「其処に居んのは分かってんだ・・・何もすぐに殺ろうって訳じゃ
ねえ、だから出て来い」

（いや、さっき思いつきり殺る気だっただろうが・・・）

かなり傲慢な態度で無茶な要求をしてくる
どうすべきか・・・ちらり、とティーシャの方を見れば何処かで拾
ったらしい木の実を食べていた
・・・飯抜きにするぞこら、と視線を送ると何を勘違いしたがニコ
ニコと残り二つの木の実を見せてきた
そして目はキラキラと・・・
仕方ない、後で注意するだけにしよう・・・

俺が適当にそんな事を思っていると、さっきの青年とは違う弱弱い声が微かに聞こえた

「キャンチャーくん・・・そんな、言い方・・・よくないよ・・・」

その声に岩の上の青年は、弾かれたように後ろを振り返る
視線の先に居たのは、服は所々破れているが・・・傷一つ無い、ずぶ濡れの少女・・・

「っ！！何で俺を追ってきた！！貴方はあそこで隠れてるって言うただろ！！」

「えへへ・・・キャンチャーくん・・・喧嘩はやいからしんぱいで・・・」

「だからって・・・まだアイツ等がうろついてるかもしれないのにっ・・・」

（アイツ等・・・？）

他のマスターとアシストが近くに居る、ということだろうか
それも、好戦的でヒトをいたぶるのが好きな・・・俺の嫌いなタイプの、相手

「くそ・・・っ・・・来やがった・・・」

青年のそんな声と共に現れたのは、

「き、ははははっ・・・みいつけたぁ・・・」

澀んだ目をした男二人組み

マスターである証の赤い刻印を右肩にしている男は醜惡な笑みを浮かべ、青年と少女を舐め回すように見る

「キャ、キャンチャー・・・くんっ・・・」

「大丈夫だ、香澄・・・貴方は俺が守る・・・俺から離れるな」

動くごとに血が滴る青年はそれでも、少女を自分の後ろに隠し相手を毅然と睨みつける

「守るう？きはははっ！！カッコいいじゃねえのお・・・俺様の力・
インネパティブル・『不可避』の前で何時まで持つかなあw？」

「・・・さっきは油断してただけだ・・・不可避だろうがなんだろうが・・・」

背に負っているバックから、大量に入っている水の入ったペットボトルの二つを青年は取り出し、

キャップを開け、少女の服や体の乾いてきた部分に水をかける

「なあにまた訳分かんねえことしちゃってんのよ糞ガキがつ!!!」

見ていた男のイラついたその声を合図に、男二人の瞳が深緑に光る

（あのアシストの男はマスターの言いなりか・・・）

アシストとマスターの瞳の瞬きが同じ、それは支配され固有であった筈の能力まで染められたということ

青年は知っているのか知らないのか、二人の男を苦虫でも噛み潰した顔で見た後・・・

空になったペットボトルを放り投げ、もう片方のキャップを開け、

「俺は香澄を守りぬく」

水晶のような透き通ったヒカリを、瞳宿らせる

男達が投げたナイフや石、木の枝が迫り来るにも関わらず瞳は逸らされず・・・退きもせず、青年は前に飛び出す

不可避・・・

その能力通り、避けたはずのナイフや石などが追跡機能を持っているかのように青年を狙い

残り半分が少女へと向かう

少女へそれらが突き刺さる直前少女の身体を包むように・・・服に染み込んでいた、青年がかけた水が集まり氷の壁となる

「不可避なら、他のものに当たらせればいい」

青年の狙い通りに彼女を狙っていたそれらは、氷の壁に突き刺さり弾かれ、力を失くす

だが青年に向かっていたそれらは容赦なく彼に襲いかかり・・・

ザグッ！ドガッグサグサッ！！

「っぐ！」

「キャンチャーくんっ！！」

肩や脇腹、腕や足に突き刺さっていく・・・にも関わらず

青年は急所だけを外し後は構わず男達に向かって、ペットボトルの水を大量にぶちまける

「んなもんで何になりやがるってんだああ？！」

「頭悪い、な・・・お前等・・・っ」

キラキラと・・・ヒカ리를反射しながら男達の頭上に、身体に向かって飛沫のように飛ぶ水を見て

青年は可笑しげに笑う

それに逆上した男が近くに用意してあった石を手を取った瞬間、

「はぁ．．．っ．．．終わりだよ．．．」

大きく息を吸い込み、青年が息を止める
それを合図にするかのように、水飛沫が鋭く尖った無数の氷へと変化し．．．

「「なっ．．．」」

「．．．っ、死ね．．．」

断末魔の叫びが森に木霊し．．．少女の刻印に、新しく模様が刻まれた

青年の能力は恐らく、サリディファイ『凝固』

息を止めている間のみ、その能力が発動される．．．といった所だろう

その証拠に、少女を包んでいた氷の壁は溶けてなくなり．．．青年は自分の能力で血を止めようとはしない

(・・・自分には使用不可・・・って事も有りうるな・・・俺と同じで)

あの出血量からしてこのままじゃ確実に数分で死ぬだろう

現に彼は荒い息を繰り返し、意識も朦朧としているらしく少女の呼びかけに反応しない

・・・ただ単に能力発動に必要なだけの精神力が今は無い・・・というケースもあるか・・・
冷静に分析しながら「漁夫の利・・・狙えるな・・・」と、ふと思っただが・・・

「み、見てるんですよねっ・・・ど、どなたか・・・キャスチャーくんを助けてくださいっ!!」

少女は傷を抑えながら叫ぶが、止血すらマトモに出来ていない
助けるには、レインが居なければいけないのだが・・・まだ、偵察だろうか？

取り合えず、青年とあの少女は嫌いじゃない分類の敵だ

(・・・仕方がないな・・・)

此処で恩を売っておくのも悪かない

それに、あの青年の能力は割と・・・役に立つだろう

泣き出している少女の前に・・・

どうやらまた拾ったらしい木の実を両腕に零れるほど抱えたティーシャと共に姿を現すと、少女は一瞬怯えたように青年の服を弱く握り締める

微かにまだ目は見えているのか、青年は焦点の合わない瞳で俺を、睨みつける

「・・・っ・・・だ、れ・・・だ・・・」

「・・・あまりにもその女の子が、誰か助けてと頼いからな・・・一応答えてはやろうと思ったただけだ」

さっきの勝負を全部見させてもらった観戦料代わりだ

俺がそういうと、呆れたような馬鹿にしたような・・・そんな笑みを微かに浮かべた

それ以外の感情が入り混じっていたような気はしたが、生憎と分かっていなかった・・・ティーシャと共に見ないフリをして止血を始める

「ぐうつ・・・あ・・・っ・・・」

やはり相当痛むのか、微かに声をあげつつも大人しく（まあ、暴れる体力も無いだろうが）抵抗のようなものは見受けられない
とりあえず止血をするのだが…宛てた先から布が真っ赤に染まっていく

うめき声をあげる元気すらないのか、青年は荒い息を繰り返すだけで…

(…不味いな…これは思ったより不味い)

何とか血は止まったが、流れた大量の血はどうにもならない

正直・・・此処まで面倒見て今更死なれても困る

どうするか…と俺が少し困っていると、珍しく大人しくしていたデ
イーシャが急に立ち上がり、

「ねーさん帰ってきたっ」

嬉しげに、救世主到来を宣言した

「遅くなり申し訳ありません」

帰って来てまず深々と頭を下げるレイス

所々服が、破れたようにほつれたようになってるのは森の中を歩
いたからだろうか？

それとも・・・

「・・・いや、君が無事で良かった・・・そうだ、一つ頼まれてく
れないか？」

「はい、何でもお申し付けくださいませ」

「其処に倒れてる青年Kを、治してやって欲しい」

「了解しました」

ただ淡々と、言われた事を実行しようとするレインに幼い頃の自分の姿が被る

感傷に浸っている場合ではないというのに、瑚杖家の呪いだろっか・
・幻を司る俺が、幻を見ている

「・・・あつ、あの・・・」

近づくレインに、不安そうな声をあげて少女Kが俺を見る

・・・ただ少し青年Kの手当てをしただけで、ヒトを・・・しかも
マスターを信用するのはどうかと思うが・・・素直でよろしいので
大丈夫だと頷いておく

「・・・少し、傷が深いですね・・・」

「ご、ごめんなさい・・・キャンチャーくん、ずっと私を守ってく
れていたから・・・」

「心配しなくて大丈夫です、私の能力なら・・・治せます、少し・
・皆さん、あの茂みの方まで離れてくださいませ」

恐らくこれは対価の発動が見られるはずです

それだけ告げて、レインはティーシャに合図を送り・・・

俺達はティーシャに押しやられるようにして、茂みの方へと身を隠すように待っていることになった

「対価・・・レインの対価はなんなんだ？」

「んとねー・・・ねーさんの力は元々痛い痛い飛んでけーじゃないから、酷い痛々除ける為には・・・」

『他者の真似事を繰り返す我が力、されど今我欲するは救済・・・』

75

上位能力発動の詠唱が聞こえる

レインの瞳が、深紅から金・・・そして、銀白に変化していく・・・魅入られたように声を出せない俺達に、ティーシャはニッコリと笑う

「対価は、周りの命を吸い取ること」

『イミテーション クリエイション
模倣を越えた創造を今・・・他者の魂^{いのち}と引き換えに』

白銀と黄金が混ざったような輝きが瞬いた・・・

そう思った直後、俺達の目の前にあった木々が、草が、花が、一瞬にして枯れる

「っ」

「きゃっ・・・!!」

「だいじょぶーだよ、ねーさん・・・ちゃんと計算してやってるか
らー」

目の前の全てが枯れ果てていくにも関わらず、ティーシャは笑う
絶対に、大丈夫だと確信した顔でそれを見つめる
悪夢とも、奇跡とも呼べる目の前の出来事を・・・

「・・・治療、終わりました」

レインのその声を聞いても、すぐには反応出来なかった

「ねーさん、おつかれさまあっ」

嬉しげに、枯れ果てた場所を何の躊躇いもなく走り・・・
レインに飛びつくように抱きつくティーシャを除いて、誰も動けな

かった

ふと、

誰かの命を対価に誰かを助ける

それはまるで・・・劣等な何かを犠牲に優秀な何かを生かす・・・
俺が嫌ったそのものじゃないか、と気付いた

・・・そして、枯れ果てた場所を見つめるレインの瞳が、
とてもとても・・・悲しげだということに気付いたのも、その時だ
った

第3話：愛してる、愛してるからどうか…（side）

「綺麗だ」

月を、星を、花を、彼女を…

美しいものを見て、綺麗だと思えるのは何時までだろう？

ボロリボロリと、剥がれ落ちるように心が磨り減っていく中で…何時まで、僕は僕で居られるのだろう

これを選んだのは僕だというのに…微かに残る心が何かを叫び続ける

—忘れるな、初めにこの戦に参加した理由を思いを—

（…まだ、残っているさ…）

誰にも死に顔を見せない為に挑んだのだと、

…彼女の死に顔を見取るのは…この先ずっとずっと…この、僕でありたいのだと

だけど、そう…今は言わない、言う訳にはいかない

何処に居るか分からない監視の目を掻い潜る為には、終わるまで言う訳にはいかない

崩れていく心に秘めて…ああ、『最後』を迎えるのは僕の身体と心、どちらが先なのだろう…

可笑しいな、答えなんて初めから…

「克哉様、どうされたの？」

僕の心が答えをなぞる前に、まるでタイミングを計ったかのように彼女が僕の前に現れる
抱き締めたい

そう思うほどの心は残っていて酷く安心した

「…イリス…なんでも、ない」

「何でもなくはないでしょ？…苦しいの？」

「…大丈夫だ、マスターとして動くには逆に調子が良すぎるくらいさ」

「…ふふ、頼もしいお方ね、克哉様は…」

誰が見ているか分からない

だから僕達はただ馴れ合いの関係を築くだけ

本当に彼女にとっては馴れ合いだけの関係かもしれない…

だけど、微笑み腕を絡める彼女の…その瞳に宿る憂いのヒカリは、今は僕だけの物だ、と言っていていいだろう？

それくらいは、その程度は…

「…君の死に様を見るのは僕が最初で最後だと…信じたい程には愛してるよ、イリス」

「曖昧な言い方するのね…罪なお人…でも、其処も愛しているわ」

早くこの戦が終わってしまえばいい…いや、終わらないで欲しい？
どっちがいいかなどわからない、もう…命の取り合いが嫌いかさえも分からない

―彼女と居られるのならそれでいい―

今の僕は、それだけで生きている
それだけの思いで…生きていける
だから、だから僕は……

「シジョン
…切断」

また一つ、自らの意思で心を壊す

彼の瞳が真紅に染まる
真紅のヒカリが瞬くのではなく、文字通り…黒の部分が真紅に染ま
り…

ベキッ、バキバキッグチャアッ…！！

屋敷の何処かで嫌な音が響いた

それと同時に、使役していた人形の手達が慌しく働き始める
その方向に…三つ四つと呼び出していた目を向かわし…見えたのは、
これでもかというほどグチャグチャな切断死体

「…派手好きになったのかしら？」

「いや…死ねばいいと、思ったから」

取り合えず死ねと、念じただけが…加減が出来なかったようだ…

そうぼんやり呟く彼は、また一つ心の何処かを失ったのだろう
その事に心がどうしようも無い程痛む

もう戦わないで、私が全てするから…

幼子のように縋って請うことが出来たなら、
彼の崩壊を止める事が出来るのだろうか？それは出来ずとも、彼を
…繋ぎとめることくらいは…

「…イリス、大丈夫だ…」

僕はまだ、僕のように…

微かに…私に微笑む彼

ああ、失ってからでは遅いと知っているのに…それでも私は彼の努力を無下に出来ない

惚れた女の弱味、だろうか…

この世の全てが狂い惑い消え去ろうとも

―彼だけは消さないで…―

届かない思いただただ心に秘めて、今日も私は貴方と共に生きるだけ秘めた思いが叫び出すかのように…涙の濁流と代わる前には、どうか戦い終わってください

幼くはない私たちが思い描いたシアワセなユメの続きをどうかどうか…消さないでいて

それが私の、命をかける願いの全てです

第4話：深まる謎と誘いの声（side?）

（何故、こんな事になったのだろうか?..）

こう思ったのはもう三回目以上で、
そろそろ正座している足が痺れてきて崩したいのだが…

「って蘭時間聞いてる?!」

「あ、は、はいっ聞いてますっ!」

腰に手を当てお説教モードの主は中々解放してくれそうにない
かれこれ繰り返して2時間程度…
さすがに他のマスターやアシスト達の動向が気になってきたりする
のだが、主は気にしないらしい

（ああ俺の主は度胸があるなあ…）

戦が始まったその日の夜をホテルで、しかも実名記入で宿泊するく
らいの強者だ
きっと誰も真似してはいないくらいだろう
まあ真似されても何も返してやれないのだが…

「って蘭時!!」

「は、はい何ですか主っ…って、あゝ」

「ほう…まだ懲りてないのか愚か者め…」

「あ、やつ、け、けけ圭二様あのそのっ…」

口調が変わる程にお怒りになられてしまった主

正直怖い、今まで模擬稽古や実施戦で戦ったどんな敵よりも…怖い

「罰として蘭時は空乃とお留守番してなさい!!」

「は、はいっ…って、えああ?!」

（お留守番って…いや、アシストの俺がお留守番で主であるマスター様が、じゃなくて主が出掛ける?!）

いくらなんでもそれは危な過ぎるし、勇敢と無謀を取り間違えて…
ってか、もう色々と通り越してアホだ、ただのアホでしかない

「あ、ある…っけ、圭二様、いくらなんでもそれは…」

「罰だよ罰、私がちゃんと帰るまで冷や冷やしなから待ってなさい

「！」

（俺の寿命をことごとく縮める気ですか貴方は?!:;）

主君の命は絶対服従…

今日ほどその騎士道のような教えを怨んだ日はあるまい
ルンルンと鼻歌を歌いながら、空乃様に『偽装』してもらい…主は
パツと見、好青年に見えるようになった
…いやまあ、普段も好青年に見えるのだが如何せん…中身を知って
からだとしても…

「…蘭時、言いたいことあるなら言いなさい、怒るから」

「いえ、滅相も…って、怒るのですか?!:;」

「はははー」

（め、目が笑ってらっしやらない…:;）

色々と一悶着?ありつつも、主はルンルンと、出て行ってしまわ
れた

「…まったく圭二は…立場分かってるのかしらね…:;」

「まったくです…マスターという立場を少しは弁えてもらいたいの
ですが…」

これでは命がいくらあっても足りない

もちろん、色んな意味でだが…精神力の方が足りないかもしれない

「…圭二様は、命を狙われていると自覚してらっしゃるのでしょうか…？」

まるで死に行くような事を何度も繰り返す

「空乃をちゃんと守ってねー」それだけを俺にいい残し、まるでついてくるなと言いたげに理不尽な命令を下す

主は、俺に死んで欲しくないと言う

なら主と共に行動し、主が死なないように戦う方がアシストの俺が生き残る可能性は上がる

マスターの死はアシストの死

…逆に、アシストが死んでしまえば…マスターは、他マスターや新たなアシストへ刻印の譲与権が与えられるが…

「自覚は、してるよきつと…」

ふいに、空乃様は少し悲しげな顔をして圭二様が出て行った扉を眺め呟く

その姿を見てふと思った

空乃様は主が好きだ

それは見ていて分かるが…

何故、主のお留守番だよ、という言葉に反発しない？無理やりにもついて行こうとしない？

そこまでの覚悟がない、とは見受けられない

現に、主が個人行動するまでは常に一緒に居るのに…

「圭二は、命を狙われているって…きっと誰よりも、自覚してる」

微かに悔しげな表情を滲ませる空乃様の左腕…

俺と全く同じ場所に薄っすらと…一瞬、赤い刻印のようなものが見えた気がした

（中々難しいなあ…）

思い出すのは先ほどの怪訝そうな蘭時の顔

分かっている、私の行動は明らかにこの戦に相応しいものじゃないけど…

「…っはあ…」

ああ、『また』だ

身体が凍て付いたような冷たさと痛みを感じて…思考が澱む

まるで自分の意思じゃない何かがあるかのように、身体が、頭が、

言う事を聞かなくなってくる

持病のようなものと、昔は解釈していた

だけど違った

私の『元々』の能力から分かった

明らかに私の中には強い意志を持った何かが存在していると
それが私を、いや…私の身体を使ってヒトの命を殺めていく…

この『略奪』の力もそう…恐らく誰かを殺め喰らったもの…私の元
々の力は、奪った力をストック出来るものだから

（何とか離れたけど…この戦始まってから頻繁にこれ…っ）

身体を駆け巡る悪寒と痛みは徐々に増していく

こんなにも酷いのは本当に久しぶりで…ああ、昔死にかけた時もこ
んな感じだった

身体の内側から何かが突き破るように出てくる気がして…とても痛
くて辛くて…そこで確か、意識が途切れて…

目が覚めたら血だらけで、何処かから『略奪』の力を喰らってきて
いたんだ

「うぐっ…あ…っ」

視界がぶれる、息が出来ない

ガクンツ、と身体から力が抜け、膝に芝生のような感触を感じた

ああ、ついに歩けなくなった

体中が痛い、冷たい

まるで心の底まで冷え切ってしまうかのように

「はっ…はぁ…っあ…？」

あれ？

私は、何時の間にこんな所に来たのだろうか？

見たことの無い場所、人通り…どころか、人っ子一人居ない
先ほど感じたのは芝生の感覚、にも関わらず今は固い土…？

「キャハハッ♪俺等が手になけなくても死にそーな奴掛かった掛か
ったーっ♪」

「アハッwこれはラッキーですねー、ちようつと力加えるだけで死
んでくれそーなマスターさん…しかも一人だけ♪」

幼い子供の声が二つ聞こえた

そう認識した直後、周りに生えている木が、動き…

「っ！？」

鞭がしなるように、枝が私を狙ってくる
転がるようにして何とか避けた、が…

「なっ…地面、が…割れた?!」

木の枝が叩いた地面が、音を立てて崩れる
その下にあるのは暗闇…虚無が広がる以外何も無い

「びつくりか？さてさてさて…容赦しないよ逃がさないっ」

「僕等の望みの為にさっさと死んでください」

言葉が終わると同時に、木々がその自慢の枝を持って攻撃してくる
言う事を中々聞いてくれない身体を叱咤しながら避けるが、先ほど
と同じ様に木の枝が叩いた地面が音を立てて崩れていく

（っ不味いね…逃げる場所段々無くなつて来て…って…？）

ボロボロ…と、当たった場所から崩れていくのは地面だけでなく…
何故か空も、何も無いはずの場所も、ぶつかつたように枝がしなり、
崩れていく

（…もしかすると、どっちかの力は『構築』^{コンストラクション}？）

此処が作られた空間だというのなら…

その中で片方が『使役』^{エンプロイメント}の力で木々を操っているのだとしたら？
対価が発動せず、二人でこれだけの事が出来る辻褄は合う

「…っ、はは…能力見破つた、りっ！！君達、のっ…力は、構築と
使役！！」

俺の言葉（一回言ってみたかった）に、一瞬顔色が変化する二人

ああ、マジで当たったよ

内心ほっとしたのも束の間の事で、
鞭のようになつた枝四本が、四方から一斉に私を狙って…

（つまり、避けられない…！！）

「…くふふ、正解ー」

「よく出来ました、ご褒美に…」

「…とっておきな、アゲルよ…おにいーさんっ」

笑う二人の子供

鞭のようになつていた木々が槍のように鋭く尖り…

吸い込まれるように、私に向かって来たのを認知した瞬間…恐怖、
焦り…それらを押し退け感じたのは激しい痛みと狂おしい程の歓喜

そして、

—代われよ…なあ、瑞希圭—

捨てるしか無かった…誰にも打ち明ける事無く捨てた過去の名を誰かが囁き

意識の海に沈んでいく私を見て、にんまりと…狂気に染まった顔で笑った気がして…

そこで、私の意識は全てを置いて途絶えた

第5話：後悔するほど似ていた（side?）

パチッパチッ…

暗い洞窟の中で焚き木をする音だけが響く

レインとティーシャはもう寝ていて…青年K（もとい、キャンチャ）は、保護してから三日経った今でも目を覚まさない

「…あの…霧夜さん…」

「…ん…どうかしたのかい？」

思わず、癖で普段と喋り口調が変わってしまった

それに気付いたらしく、瑞希 香澄と名乗った少女はほのかに笑う

「ふふ…霧夜さんって、女性に苦手ですか？」

「いや…苦手ではないよ、ただ…女性には無礼が無いようにと…教育を、受けてきたものだからね」

一瞬浮かんだのは糞爺の姿

あれから兄である劉生には会えていないけど、嫌がらせか何かをしていないだろうか…

もししていたら、戦を勝ち残った後、願いを一つ何でも聞き入れてくれるという神の祝福とやらで殺してやる
そう胸に誓っていると、香澄ちゃんが小さく笑う

「…どうしたんだい？」

「いえ…ふふ、何だか…お兄様みたいだなんて…懐かしくて…」

「君にも、お兄さんがいたんだね…俺にも、居るんだよ、どうしようも無く駄目兄だけど」

思い出すのは何時も失敗を繰り返し…

それでも一生懸命で、挫けない…とても馬鹿で、駄目で…とびっきりの笑顔で笑う、劉生の姿

自然と、懐かしむような顔になっていたのだろうか、香澄ちゃんが優しく笑う

「ふふ、お兄様に駄目なんて言っちゃ駄目ですよ、それに…大好きだって顔してます」

「な、そ、そんなことないさっ」

「そんなことあります、顔赤いです」

ニツコリとそんな事を言われると、どうしようもなくなる
羞恥をやり過ぎすように、火に木を加えながら…ふと、香澄ちゃん

のお兄さんがどんなものか気になった

「香澄ちゃんのお兄さんは、どんな人なんだい？」

「…お兄様は…とても、優しい方でした…お母様やお父様…お爺様達は、厳しかったから…いつも弱虫で泣き虫な私を、優しく守って…何時も、側に…居てくれていました…」

「そっか…いいお兄さんなんだね…」

「はい…今も、私の自慢のお兄様です」

誇らしげに、少し寂しげに…思い出を語るように、香澄ちゃんは始終笑顔で…

何らかのアクシデントで、お兄さんはもう『思い出』になってしまったのだと、話素振りで分かってしまった

聞くべきじゃなかった…

少しだけ俺が後悔していると、香澄ちゃんは察したのか慌てて言う

「あ、別にお兄様が亡くなったとかじゃないんですよ、お兄様は…行方、不明なのです」

「…行方不明…」

「…はい…私は、お兄様は今も何処かで生きていると…信じているのです」

昔から病気がちで、持病も持っていました…お兄様は、今も何処かで生きているんです…絶対に…

そう呟く彼女は、何処か確信のようなものを抱いているように思えた
それが何か、は俺には分からなかったけど…

どうしてか、応援したくなった…そして、会ってみたいと思った
彼女に此処まで信じられ、愛されている彼女の兄に…会ってみたい
と、心の底から思った

しばらくして香澄ちゃんは眠りににつき、今日は俺が寝ずの番だな…
ぼーっとそんな事を思っていると、

「…お前…霧夜、だっ たか…？」

彼女の話の途中から…起きている気配のあったキャンチャーが、立ち上がる…として…

「っう…」

ふらりと、膝を付く
思わず駆け寄ると、あの時見たような曖昧な表情だった
今、少しだけその表情の意味が分かった

キャンチャーは、どうしていいか分からないのだ

「…レインの治療は、流れた血まではどうしようもないんだ、だからあまり無理はするな」

「…あんた…なんで、俺を助けた…？」

「あ…？」

蹲りながらただ呆然と、小さく呟かれた疑問

生憎と俺も探し中だ…そう告げると「馬鹿じゃねえの…」と乾いた
笑い一つ残し、彼はまた目を閉じた

(…まるで、昔の俺を見てるみたいだな…)

期待しても裏切られると知ってはいる、なのに絶望は出来ない
心の何処かで何かを信じ続けていて…諦めているフリしか出来ない、
幼い子供…

「…俺も人の事言えないし何も知らないけど、まあ…」

これから、よろしくな…？

呟いた言葉に予想通り返事は無く…

俺が静かに焚き木の前に腰を下ろすのと同時に、キャンチャーの溜

息のような吐息が聞こえた気がした

推定年齢18歳…

そんな青春真っ只中にも関わらず屈折しまくりの青年、キャンチャ―
正直、利用し利用される関係のままで終わりたいと思っているつもりだが…

（無理だろうな…）

知らないフリをするには、道具として見るには些か…昔の生意気で仕方なかった俺に、似すぎている

彼に何かをして、今の俺が変われる訳でもないのに
まるで過去を…

誰にも救われる事の無かった事実を変えるかのように、彼に過去の俺を重ねてしまうであろうことを、この時俺は…ムカつくくらいに分かっていた

過去は変わらないと、分かっていたのに…

第六話：誘われた雷鳴、そして…馬鹿（side?）

ああ、僕はどうやら夢を見ているようだ

軽く思考が現実世界から架空の世界にダイブしようと準備運動を始める

もう一度、そう…万が一、と言う事を心底期待して目を閉じる…
そして開けると、

「……はは、僕はまだ夢の中に居るようだ」

「あら、私達寝ても覚めても同じ夢を見ているのね…ふふ、克哉様の惚けたような微笑を見れるなんて…なんて幸せな夢かしら」

隣で微笑み、冗談を口にするイリスも目は驚きの色を宿し目の前のありえないものを見つめている

…しばらく、馬鹿げたこれが夢だといいな、と…淡い期待はどうやら意味のない事のようにだ

「…イリス、これは一体どういうことだと思う?」

「そうね…雷鳴と一緒に、翼の生えた茶髪の青年（?）が降ってきた、ってところかしら?」

「夢じゃないのか?」

「ふふ、夢の中でまで私と一緒に居たいの？」

悪戯っ子のように僕を見るイリスに、若干気恥ずかしくなり顔を背け、目の前の眠っているらしい青年を見る
見た所、どこにも刻印がない

有り得ないが一般人…という括りでいいのだろうか…

「……兎に角…どうにかしないと、な」

未だ正体不明の淡い光に包まれ浮いている青年に近づくと、

「克哉様、何かあったら困るわ…優しいのはいいけど、此处は私に任せてもらえるかしら？」

苦笑したようなイリスの声と共に、熊のような大きさの人形一体が進み出て青年に触れる

パチッ、と小さく弾かれたような音が聞こえそのままヒカリは青年に吸い込まれていき、人形の腕に青年がゆっくりと落ちてくる

「…今のは…」

「取り合えず…こつちにも、この子にも危害は無かったようね…」

すやすやと穏やかに眠り続けている青年は、酷く幼く見えた

そして、僕達の目の前で背中の中の羽が瞬き消えていく…

（…コイツは一体…何なんだ…？）

羽を自由自在に扱える力など、見た事も聞いた事も無い

それに、力を扱えるヒトとは一通りの面識はある筈だが目の前の青年は記憶に無い

知っているヒトの中で、似たような顔も無い

（どうするべきか…）

色々と思い悩むことはあるが…

「…取り合えず彼が突き破った屋敷の屋根をどうにかしないとな」

「そうね…大雨なのに、屋根空いたままだと濡れちゃうわ」

僕と彼女の言葉に、コクン…と人形達が頷き修復を始めてくれる

…若干、ホラーのようなその姿に慣れてきたのか、パーツだけの人形達が可愛く見えてきたような気がした

「…取り合えず…屋根の修復と、この謎の青年の部屋は確保…出来たな」

無駄に多い部屋の一つ、まだ眠ってはいるが変な気を取られても困

るので、僕等の部屋の隣を青年の部屋とした
侵入者も今の所ゼロ…する事もないので、眠っている青年を観察し
ているが、如何せん…

「それにしても…寝相、悪過ぎやしないか…？」

話している途中にも、彼の身体から布団がずり落ちる
それを掛け直したのは今ので…恐らく、5回目だ
僕とイリスはどちらかと言えば、寝ている間動かない方だ
だから正直、青年の寝相の悪さに驚くが…まあ、見ていて飽きはし
ない

「…っ…ん…あ？」

そうこうしていると、どうやら目覚めたらしい
ぼーっとした顔で俺達を眺め、首を傾げ…そしてそのまま、

「…おやすみい…」

「って、悪いが寝るな青年…；」

夢、と結論付けたらしい青年が眠ろうとするので慌てて止めると、
少し唸りながらも此方を見る
蒼と翠が混ざったような左目と、紅と黒が混ざったような右目が僕
を真正面から見つめる

思わず、息を呑み…素直に、美しい両目だと思った

「…あー…なにが…おこっ…てか、だれ…おま…あれ、こっ…どこ…?」

キヨロキヨロと、眠気眼で辺りを見渡す青年

言葉を補うと恐らく、「何が起こった、てか誰お前…あれ、此処どこ?」と言った感じだろう、いや、めんどくさいのもうそういう事にしておく

「…色々と聞きたい事があるが、取り合えず僕は柏木 克哉…此処は柏木家の屋敷、お前は空から雷鳴と共に降ってきた」

「ほえー…あ?つて、え、え、俺ってば雷鳴の申し子的な?!」

この目が綺麗な青年は、変な所に喰いついてきたキラキラと眩しすぎる程に目を輝かせる姿は…お前本当に寝起きなのかと疑いたくなるほどだ

(…いや、それより僕は寝ている方が大人びて見えるヒトなんて初めて見たぞ…)

取り合えず色々と混乱しているのだが、そんな自分を叱咤激励して感覚がずれていると断言出来そうな青年に、知るか、とだけ言うちえー…けち、と僕が悪い事にされたような言葉を返された…心中複雑だ

「…取り合えず、お前の名前は？」

「お？何々、俺の名前聞きたいのかよ？」

呼ぶ時に困るから仕方なくだ、と言いたいが…

「うわー、俺ってばよく分らん場所でも人気者だな、さすがだぜ
！！」

と、一人で盛り上がっているの…僕は大人だ、と言い聞かせスル
ーすることにした

「ようし、俺はな俺はな、葵〓ウィンデル〓ひすいだっ！！」

どうだ、恐れ入ったか！！と、葵は笑う

正直に言いたい、突っ込みたい…ただ適当に思いついた三つの名前
を連呼しただけじゃないのか、と

けど、僕は大人だ

いくら相手が理解不能だろうと、優しく包み込むように返答してや
るのが大人というものだ

例え相手がいくら馬鹿だろうと…そう、会って間もないのに生粋の
馬鹿だと分かるような馬鹿だとしても、だ

「よ、よろしく…葵…」

「おー、未来の王様、葵様が宜しくしてやるぜっ！」

最早突っ込む気も起きない

無駄に元気で馬鹿な…雷鳴と共に降ってきた、

（自称）未来の王様の青年、葵「ブライン」ひすい（これも偽名な気がする；）

正直、めんどろなことになるそうな予感がヒシヒシとする…何せ、彼は生粋の馬鹿だ、しかもカテゴリーは一般人

力の無い一般人はもう何週間か前に此処一体から逃げ出し、そしてここいらはもう閉鎖されている

居るのは能力のある、一般人のみ…

一般人は、巻き込んではない

この戦のルールの項目に、デカデカと書いてあったものだ

巻き込んだ…ではなく、僕も被害者のようなものだが…力ある者の方が悪い、とされる今の時世…

おまけに、この屋敷から一般人が大勢いる場所まではかなり遠い

「…はあ、僕はなんて運が無いのだろう…」

俗世と関係を絶つ

それにより、柏木家は古き良き伝統を穢されずに守り継ぐことが出来る

所謂鎖国状態な訳だ、まあそれは構わない…めんどろことが少なく

てすんだのだが、

「ん？どったカシワギ？溜息はなー…皺が増えるんだぜっ！」

「いやに其処だけリアルに言っな…」

「はははっ、逃げるような小さい幸せ何て、俺は手にしなくても幸せなんだっ！」

（ああ、確かにお前は幸せそうに見えるよ…）

厄介ことが、3倍くらい増えた

この戦、無事生きて終わって次があれば…鎖国は止めようと提言しよう

僕が考えながら黙っていると…

「ふわあ…んー…ねみいー」

馬鹿は大きな欠伸を一つして、勝手に…お休みい、とまた眠ってしまった

声をかける間もなく、すやすやと寝息を立てる葵に、脱力感を激しく覚えながらも…

「…馬鹿だな、コイツ…」

自然と、笑みが零れた

控えめに、柔らかそうな頬をつつくと幸せそうな顔で「ふにゃ…も、たべられねえよお…ぷふふっ…」と、寝言を言う

その時の顔が、先ほど起きていた時と同じで…

ああ、寝言を起きた状態で言っていたのか…これぞまさしく寝言は寝て言えだ、と妙に考え深い

（イリスが側にいる時以外で、こんなに穏やかな気分になれたのは久しぶりな…）

ぷにぷに、と頬をつつきながら僕は…何処か温かい気分、久しぶりに浸っていた

戦が始まって10日経ったこの日…

雷鳴と共に落ちてきたのは、どうしようも無い程厄介で馬鹿な美しい瞳の青年

成り行きで守らなければならなかったが、僕は何故か…葵…ウィンドル…ひすい、そう名乗った彼が居る事で僕も、そしてイリスもまた、救われるのだと…

何故か、そんな予感がしていた

「むにゃ…ぷふ…ぷふふふ…」

振り向くと、馬鹿はまだ笑いながら枕を巻き込み寝ていた

（前言撤回……厄介の方が大きいな、これは……；）

第7話：憎まれるべき存在を守ると誓うのは愚かでしょうか？（side?）

青い空に白い雲

満ちるのは光、とてもとても……穏やかで温かな温もり

側では透き通った水が湧き出て、水路を満たす

そして向こうでは水の壁が光に反射し、美しい七色の光をぼく達に見せてくれる

ふと、

視線の先に白いワンピース姿の少女が現れる

大きな白い帽子を被り、小さなバックを持って……そしてその側には、少年の姿も……

そして、

その少女と少年が振り返った

四つのつばらな瞳が嬉しげに細められ……少年は笑い、少女は口を開き、

そして、

「『様！』」

彼女の口から出てきたのは、何かが混ざったような雑音だった

それでもぼくを呼んでいるのだと、分かった

嬉しげに手を差し出して、手を招いて……

だけど、

（ああ、これは……）

これは、夢だ

すぐそう思った……いや、気付いた

嬉しげに笑う少女も少年も、美しく懐かしいその景色も全て全て……

「夢、幻だ……」

そう呟いた瞬間、少女と少年の顔が曇り、泣きそうな顔になる
それで分かった

ああ、これはあの日の再現だ、と

これらは全て終わってしまった過去でしかなく、ぼくは……いや、
私は、

「私は、此処になど居ない」

穏やかな場所など私には無い
そうだ、無いのだ……こんな優しい場所など、私には無い

（これはただの、美化された過去だ）

この水の壁もそう……

最後に見た時は、人の血で真っ赤に……赤黒くなっていたではないか
そう思った瞬間、水の壁が赤黒く変わる

どこか残念がる心に蓋をして、溜息と共に思う

（……仕方がない、ことだ）

この大地もそう、土は抉られ血に満ちていたではないか
この空もそう、赤と黒と灰色に満ちた色だったではないか
この水路もそう、汚れていたではないか

目を瞑り、次に開ければ……

頭に思い描いた通りに目の前の空間は穢れていく

赤く黒く、灰色に……

狂った、穢れた色に染まっていく……

「——い」「——じ」「『様っ！——！』」

また何かの声が混ざった

今度は先ほどよりもはつきりと……それでいて必死気に

（ああ、そうだったね……）

——私は、帰らなくちゃいけない——

『私』を呼んでいたのはこの少女じゃない

ならば、私は此処に居るべきではない

そう思い立ち、背を向けた……瞬間、

「おれは、おまえをゆるさない」

少年の声が、聞こえた

そしてすぐ、睨まれているような視線を感じた

（ああ、此れは振り返らなくても、考えなくても思い出せるね……）
だから、

「そうだね、私を……許さないで」

笑みを浮かべ言い渡そう

自らが美しく保っていた思い出に、美化し忘れ去っていた愚かな記憶に、

私を憎めと、言い渡そう

そして忘れるなど、

私は彼らに憎まれているのだと

今回の戦で……彼女と彼を救う為にも、私は………

——さよなら、私の思い出……さよなら、大切な大切な……—

妹だった、親友だった、誰かさん達……

* * *

「——つ圭二様——」

何故この人は本当にもう好き勝手してくれるのか、そんなにも俺は頼りないだろうか？

そうイラ付きを通り越して自己嫌悪してしまう程に今、俺の腕の中で血塗れで眠っている主は無茶が過ぎる

手の甲の刻印が疼き、隠れ家（今は空乃様が留守を守っている）から飛んで来てみればこの有様だ

腕と足を何かで貫かれた痕があった

それだけで許しがたい事実だというのに、それ以上に……

（また主が、俺が不甲斐ないせいでその手を汚してしまわれたっ……！！）

どうしようも無い怒りは、物体と化している人間だったものではなく自らに向かう

当然だ、俺は主の命と言えどただ安全地帯でのうのうとしていただけだ

主が危機に瀕していたというのに、ただ俺は……

「何故俺は肝心な所で役に立てないっ！！」

噛み締めた唇から血が伝う

ただ唇を強く噛み締めていなければ、主を抱えている腕に力を入れてしまいそうだから

（ああ、主っ……）

俺は、自分が傷付くことなど怖くないのです

自らが死を迎える事など、人を殺めることなど、何一つ怖くなんて無いのです

ただ俺は、貴方様が……

琴宮圭二様、俺の主……貴方様が消えてしまわれる方が、何よりも恐ろしい

恐れを抱くなど、騎士失格だとは知っているが……

それでも俺は、主を抱える手の震えを治める方法など、見当もつか

なかった

しばらく走って、

何とか誰にも会わず俺は主を抱えて隠れ家に戻った

そして空乃様に事情を話しながら主の手当てをした後、彼女には眠ってもらい俺は寝ずの番の役を買って出た

ただ、何かをしていなければ不安だった

ただ、主の……役に立てて居なければ怖かった

「……騎士の、名折れだな……」

焚き木を見ながら呟くのは、そんな事……正直、どうしようもない騎士だと思う

何もしていない、ただ飾りだけの騎士
そんな気さえもして、腰の短刀に無意識に手を掛け……溜息を吐いた
直後、

「こら、溜息なんて簡単に吐くもんじゃありませんっ」

手に触れていた短刀の感触がなくなり、代わりにそんな声と共にコッソ、と……頭に何かが当たった

顔を上げると其処に居たのは、

「っ主?!」

腕と足に包帯を巻いて、手に俺の短刀を持っている主
瞳から赤の光が収まっていくのを見届け、俺は主に近寄ると、

「だーれが主だ、蘭時い？」

「あ、え、い、いえっ」

「……貴様をパンダと同じ扱いにしてやろうか」

「け、圭二様それだけはっ……！」

「はっはっはー」

案外元氣そうに、昼間のように喋り笑う

その姿に安堵しながら主……圭二様が俺の隣に座るのを手伝った
やはりまだ痛むのか、微かに表情を変化させたが、

「んーでさ……蘭時は、何か言うことある？」

焚き木を突付きながらゆるりと笑い、そう聞いてきた

横目で伺い見るが、ただ焚き木を見つめるその目は何も考えていないように見えた

「……圭二様、単独行動はお控えくださりませんか？」

「わーお割と直球で来たねー、蘭時らしいや」

「御戯れは止して下さい、圭二様……」

「ははは、冗談冗談」

遊んでいるとしか思えない圭二様に、

呆れたような目で見ると、ごめんごめんと返され黙るしかなくなる
そして、

ほんの僅かの沈黙の後……

「……私ね、時たま……発作、みたいな起こすんだよね」

独り言のように、圭二様が言った

「発作、ですか？」

「そう、発作……息が苦しくなって、何も分からなくなって……自分が消えるような感覚に陥って……」

そして、次に目覚められた時全てが終わっているんだよね

そう言い、笑った

そして、

ほんと、可笑しい可笑しい……と、まるで他人事のように呟き、俺を見て

「私さ、蘭時と空乃……殺したくないんだよね」

だからごめんね……呟き、苦笑する圭二様

（ああ……俺の主は、本当に……）

本当に優しくて、本当の本当に、

「馬鹿ですね、圭二様は」

「って、へ？」

素直に言つと、信じられないものを見た的な顔をされた
正直複雑だが、この際だから

「馬鹿です、圭二様、本当に、馬鹿で馬鹿で馬鹿で……ああもう世界一といえるほど、貴方様は馬鹿ですよ圭二様っ!!」

あ、世界一辺りから凹んでしまわれた……

ほんの少し罪悪感が胸を占拠してきたが、取り合えず押し止める

（そうだ俺、もう少しだ……まだ話はある、よし、もう少し頑張るぞ俺）

そして息を吸い、

「貴方様がそう思われるのと同じ程に、空乃様と俺は、貴方に死んで欲しくないのですよ」

無礼とは思いつつも言い切った
ほんの少し、呆然と圭二様が大人しくされているので、
……大人しくされているので……

「大体、貴方様は勝手過ぎます、少しは心配する方の身にもおなり下さい」

「え、あ……ご、ごめん……」

「謝罪の言葉が欲しい訳ではありません、キチンと態度で示して下さい、じゃなきゃ俺は暴れますよ」

「へ?! って、蘭時性格変わって……」

「要らぬ事を言うのはこの口ですか?ちゃんと約束は守ってもらえねば俺も考えがありますよ、圭二様?」

口を掴み、ニッコリと……

満面の笑みで告げると、圭二様も笑みを返してくださった
何気に、口を掴んでいる手が痙攣しているのを感じ取ったから恐ら
く苦笑だろう

……ふむどうやらこういう脅しが圭二様には一番効くようだ……な
らば、

ガシッ、と逃げられないように圭二様の肩をホールドし、更に追い
詰めるべく言葉を並べる

「さて圭二様、俺と約束をちゃんと下さるのでしょうか？」

「え？！えー……え、えーと、は、はははー」

「おやおや圭二様、目が泳いでらっしゃいますよ？約束を守れない
ような何かやましい事でもあるのですか？」

「い、いやいやっ！！やましい事なんてそんなことあったら空乃に
殺されるよ私！！」

「でしょうね、さて……約束して下さるまで俺は梃子でも動きませ
ん、覚悟なさって下さい」

「ちょ、いや、な、何で覚悟かなー……って、わ、分かった約束す
るよ！！約束するからその笑み止めてー！！」

涙目になって騒いで居る圭二様を見て居るのが、思いの他楽し……
ゲフンゲフン

取り合えず、という形で約束してくださったので残念……ゴッホン
ゴホゴホ

……まあ、結果オーライとしておく事にした

いやはや、丁寧に頼めば案外分かってくださるものなんだなあ……

笑顔が大事な笑顔が！

今度から圭二様に何か頼む時は満面の笑みをして言おう
そう決意していると、

「あー……あーあ……あー、もう……まったく……」

大袈裟に溜息を吐きながらも主の顔が嬉しそうに笑っているのが見えた

その顔に、ああ……言えて良かった、そう思いながら

「では圭二様、もしも約束を破ったら首輪を付けますので御覚悟下さい」

半分冗談半分本気な事を告げると、ほんの少し青い顔で頷かれた……
やっぱり圭二様を苛めるのは思いの他楽し……ウオッホン
割かし心が痛むので、残念だが少し控えようと思った

そして、

これでやっと、守れるのだと……
心の底から嬉しくなった

……ちなみに圭二様は、
まだ青い顔で「う、うそだ……ら、蘭時がSになっちゃったなんて……
う、うそだぁ……」等と御戯れを呟かれていたので、

「けーいーじーさーまー？」

「ひゃっはい?!」

「……その怪我完治するまで外には出しませんので御承知下さい」

ニツコリと告げた

……何故か石になったかのように停止し、絶望的な顔をしていたので抱えてベツトまで運ぶ事にしたのは……後々面倒なので空乃様には秘密、という事にした

そして、ふと

「……証が二つになっちゃったなあー……」

運んでいる途中……

俺の腕の中で、月明かりに透かすようにして手の甲の二つの刻印を見て悲しげに圭二様が呟いた

俺が何も言えないで居ると、ほんの少し圭二様は表情を和らげて、

「明日から、三人で一緒に謎解き……頑張ろうか」

そう告げてくれたから

ただ、はい、と返事をし……彼の部屋、としている個室に送った

そして、

「……で？何であたしに黙って二人でイチャイチャしてる訳？」

部屋に居た空乃様から二人で説教を受け、挙句圭二様は発作の事を喋らされ平手をされ、

「健やかなる時も病める時も、片時も空乃の側を離れません」

という、何処かで聞いたことのあるようなセリフを固く約束させられていた

それを見て、圭二様に……

「ざまあみる」

と思ったことは……無い、と言つ事にしておきたいものだ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5289x/>

カミサマに愛された故に憎んだ青年のモノガタリ

2011年12月2日20時45分発行